

のCTVビルは周りとは様子が違って  
いた。鉄筋コンクリートが無残  
に崩れ落ち、エレベーター周辺部  
分を残して全壊の状態。がれきが  
積み重なり、一部では火災が発生  
し隙間から黒い煙が出ていた。  
一般的に、人命救助のリミット  
は72時間。これを超えると、生  
存率が急激に低下するといわれ  
ている。JDRは到着後すぐ、24時  
間体制で捜索活動を開始。一枚一  
枚、がれきをはがしては、見て、  
聞いて、さわって……。4チームに  
分かれて、交替で慎重に確認しな  
がらの作業だった。

東京消防庁警防部の吉永忠司  
さんは、「少しでも早く、全員を  
がれきの中から出して、安心でき  
る場所に連れて行ってあげたい。  
そんな思いでいっぱいだったとい  
う。余震が続き、冷たい雨が降り  
しきる中、隊員たちは「そこに命  
がある限り」と懸命に作業を続け  
た。24時間体制での活動は心身と  
もに過酷だったが、「救助活動は  
集中力がカギ。私たちは一回海に  
出ると、数日、数週間は船の上で  
の任務。JDRはその力を発揮す  
べき場所です」と、海上保安庁第  
三管区海上保安本部羽田特殊救難  
基地の中澤克元隊長は強調する。

またJDR救助チームには、建  
築基準の専門家が同行。二次災害  
が起きないように、建物の倒壊状況  
を確認し、がれきの撤去方法に細  
心の注意を払った。さらに、ニュ  
ージーランド、オーストラリア、  
中国など他国の救助チームとの連  
携も光った。刻々と変化する現場  
の状況を的確に把握するため、同  
じエリアで活動するチームで毎日  
ミーティングの場を設けた。  
そして活動5日目のこと、JDR  
に一通の手紙が届けられた。日  
本から留学中の娘さんの安否確認  
のために現地入りしていた家族か  
らで、献身的に救助活動に当たる  
隊員たちへの感謝の気持ちがあつ  
た。24時間体制での活動は心身と  
もに過酷だったが、「救助活動は  
集中力がカギ。私たちは一回海に  
出ると、数日、数週間は船の上で  
の任務。JDRはその力を発揮す  
べき場所です」と、海上保安庁第  
三管区海上保安本部羽田特殊救難  
基地の中澤克元隊長は強調する。

に引き渡す形で幕を閉じた。  
今回は、JDR救助チームが2  
010年に国際捜索・救助諮問グ  
ループ（INSARAG）から最  
高レベルの「ヘビー級」の認定を  
受けてから初めての派遣だった。  
「日本チームが救助の国際基準を  
満たしていたことだけでなく、士  
気の高さと規律の正しさを示すこ  
とができた活動でした」とJDR  
事務局の大友仁さんは話す。  
第三陣が帰国の途について3月  
11日、日本では東日本大震災が発  
生。隊員たちの多くは帰国後すぐ、  
各自の任務を遂行すべく、東北に  
向かった。いつ起こるか分からな  
い自然災害。現場で全力が尽くせ  
るよう、JDR隊員たちは今日も  
訓練を続けている。そこに救うべ  
き命がある限り！



がれきの中を捜索する救助犬クレッシェンドとハンドラーの杉本さん

初めての先進国派遣  
いち早く現場へ  
「ニュージーランドで地震が起  
きた！」  
2011年2月22日、JICA  
の国際緊急援助隊（JDR）事務  
局に第一報が入ったのは、始業少  
し前の朝のことだった。8時51分  
（日本時間）、マグニチュード6.  
3。ニュージーランド南東部、ク  
ライストチャーチ近郊を震源とし  
た直下型の地震で、市街地を中心  
に被害が拡大しているというニュ  
ースだった。  
JDRの歴史の中で、これまで  
先進国への派遣経験はない。しか  
し、開発途上国であれ先進国であ  
れ、緊急援助に国境はない。ニ  
ュージーランド政府の要請を受け  
て、22日の18時過ぎには調査チ  
ームが成田空港を出発。現地の情報  
収集に当たることになった。  
時を同じくして、警察庁、総務  
省消防庁、海上保安庁を中心に、  
現地に赴く救助チームの編成が  
進められていた。今回は初めて、日  
本の政府専用機を使っての移動。  
第一陣66人がクライストチャーチ  
に到着したのは、発災から39時間  
後、これまでに一番早い現地入り  
だった。  
市街地には、所々に全壊、半壊  
の建物があるながらも、ほとんど  
被害がない場所も多く残ってい  
た。しかしその中でも、7階建て

## ニュージーランド from NEW ZEALAND

### 救助チーム

国際緊急援助隊の活動地は、開発途上国だけではない。  
その一例が、2011年2月にニュージーランド南島で発生した地震。  
発災後、わずか39時間で救助チームが現地入り。  
がれきの中に残された人々を救うため、24時間体制で捜索活動を行った。

# がれきの中の声を聞く



ライトを照らしながら夜通しの作業。棒の先にカメラが付いた「ボーカー」を使い、小さな隙間までくまなく確認する



活動最終日、CTVビルの前で黙とうするJDR隊員。懸命に捜索活動が行われたが、生存者の発見には至らなかった



CTVビルのそばに設けられた献花台。クマのぬいぐるみはJDRががれきの中から発見したもの



がれきの撤去は、手作業で行うこともあれば重機を使うことも。現地の作業員と連携を図りながら、二次災害が起らないよう細心の注意を払った

